

「科学技術イノベーション政策のための科学 研究開発プログラム」 研究開発プロジェクト事後評価報告書

平成 30 年 3 月

プロジェクト： 医療の質の地域格差是正に向けたエビデンスに基づく政策形成の推進

研究代表者： 今中 雄一（京都大学大学院医学研究科 教授）

実施期間： 平成 26 年 10 月～平成 29 年 9 月（36 ヶ月）

1. 個別項目評価

（1）研究開発プロジェクトの目標の達成状況

目標は一部達成されたと評価する。

本プロジェクトは、医療の質に関する地域格差を課題として取り上げ、レセプト情報・特定健診等情報データベース（NDB）の大規模個票データを解析することにより、全国各地域における医療の質を計測し可視化したうえで、その結果を広く医療関係者および政策関係者に共有することで、医療システム再構築に向けた政策の立案に結びつけることを目指したものである。

超高齢社会にあって財政的な逼迫に直面する我が国において、より効率的かつ質の高い医療の提供を実現することは喫緊の課題となっており、その意味で本プロジェクトの目標設定は重大な意義が認められる。科学的なエビデンスに基づいた効率的・効果的な地域医療の実現に向けた政策形成を推進しようとする本プロジェクトの目標は、本プログラムの趣旨に合致しある程度妥当であった。

研究開発を通じて、医療ビッグデータを活用することにより医療の地域格差の実態を明らかにすることに成功した。対象は、5大疾病のうち脳梗塞のみに限られるものの、全国の各地域の医療の質指標をわが国で初めて実測・可視化するに至った。また、明らかにされた格差に関する情報を地方自治体の首長や医療政策関係者、病院をはじめとする医療提供者や保険者といった医療をめぐるステークホルダーと共有することにより、政治的に機微をとまなう情報の取り扱いに関する情報連携に向けた実験的な取り組みも重ねられており、データを活用した合意とアクションの形成過程を示した。その一方で、本プロジェクトの目標とされた医療の格差に向けた政策形成の推進については、地域における医療提供の集約化・拠点化と連携の重要性を示すにとどまっており、格差の是正に向けた具体的な政策的オプションが示されたとは言い難い。

なお、本プロジェクトについては、研究開発期間と研究開発費の規模に照らして、目標設定そのものが過大であったことは否めず、研究開発の開始段階においてプログラム側と協議を行ったうえで対象や手法を限定するなど、メリハリの効いたプロジェクト運営が求められた。また、研究開発当初は地域格差に関する情報の公開を前提としていたものの、ステークホルダーへのアンケート調査やインタビューを通じた意識調査の結果を踏まえ、その機微性を考慮し、分布状況などの限られた情報のみを公開する形に方針を転じている。NDBデータの公開制約については制度的な限界はあるものの、その意義と重要

性を鑑みれば、一定の匿名性を保ったままでより精度の高い情報を公開するなどの弾力的な運用の可能性を積極的に模索するべきであった。その点において、研究開発の展開を踏まえた目標の修正は一部適切になされたにとどまる。

(2) 政策のための科学プログラムの目的達成への貢献状況

○客観的根拠に基づく科学技術イノベーション政策形成への寄与という観点で、成果は、現実の政策形成に効果・効用をもたらすことができる程度できた（中長期的にある程度期待できる）と評価する。

これまで均質かつ普遍的な医療サービスの提供が前提とされてきた地域医療について、医療ビッグデータを解析することで、地域ごとに提供される医療サービスの質に大きな格差が存在していることを初めてかつ客観的な形で明らかにしたことの意義は大きい。また、政治的に機微を伴う成果の公開にあたり、医療をめぐるステークホルダーに対し、複数回にわたる意識調査を実施することで段階的な理解を促すなどの丁寧な工夫が凝らされたほか、開示に否定的な見解を有する主体に対して積極的に説得を試みるなど、情報公開に向けたコンセンサス・ビルディングの観点でも意欲的といえる取り組みがなされた。一方で、特別枠として期待された格差の要因の解明やその是正をはかるための政策・制度設計の提案という観点では、成果公開に関する合意形成が障害となったこともあり、必ずしも十分な取り組みがなされたとは言い難く、従来より指摘されている枠組みを超えるような知見の創出には至らなかった。合意の調達そのものが新たな政策形成に直結することが予想されるだけに、創出された成果の今後の活用が期待される。

○また、本プロジェクトは、「科学技術イノベーション政策のための科学」に資する学術的知見あるいは方法論等の創出にある程度貢献できた（ある程度期待できる）と評価する。

本プロジェクトには、NDB に代表される全国レベルのデータをもとに科学的手法を用いることで新たな政策的知見を創出することが期待された。必ずしも品質が担保されていない膨大な個票データを分析可能な形にクリーニングしたうえで、医療の質をめぐる指標の開発と格差を可視化したことの意義は大きく、今後の学術的知見や方法論の深化につながるような一定の貢献がみられたといえる。ただし、指標としての妥当性や指標の特性を踏まえた活用方法の検討、結果の公開プロセスなどの点で課題を残している。

また、本プロジェクトを通じて、多くの医療政策関係者や医療提供者といったステークホルダーらに対して、医療政策上の新たな事実を提供したうえで、賛同を調達するといった合意形成に向けた取り組みが疑似的に試みられるなど、多様なステークホルダーとの協働や対話が試みられており、その意味でネットワークの拡大にも一定の貢献をした（期待できる）と評価する。

なお、本プロジェクトで得られた知見をもとに、京都大学学際融合教育研究推進センターに研究代表者がユニット長を務める超高齢社会デザイン価値創造ユニットが設置され、産業競争力懇談会（COCN）による支援のもと本プロジェクトの成果を発展的に展開させていくための体制が整備されている点は特筆される。

(3) プロジェクト目標達成に向けた取り組みの状況

○研究開発活動は概ね適切になされたと評価する。

全体として、過大ともいえる目標設定であったにもかかわらず、NDBをもとに医療の質に関する指標の構築と地域格差の解明という点で一定の成果が取りまとめられており、研究開発活動は一定程度適切に行われたと考える。また、アンケート調査やインタビュー調査を通じた意見収集の結果を踏まえ、成果公開に関する方針を変更するなど、プロジェクトの進展に合わせて最終的な成果の位置づけを含めた軌道修正が試みられた。一方で、情報公開にあたって障害となった制度的な制約や否定的な見解については、研究開発の初期段階あるいは開始前から相当程度予見可能であったものであり、その点において予め対応方策が整理・検討されるべきであった。

○研究開発の実施体制および管理運営についても概ね適切になされたと評価される。

広範な目標設定に対して、研究代表者のリーダーシップと主たる研究開発実施者の貢献により、精力的な研究開発が進められた。一方で、創出された成果のうち、とりわけ医療の質の格差の是正に向けた政策形成部分については、当初計画された目標に照らして限定的な成果にとどまっており、必ずしもすべての研究開発実施項目について効果的な研究開発が推進されたとは言い難く、マネジメントの点においてやや課題が残る結果となった。

2. 総合評価

一定の成果が得られた／一定の期待が持てると評価する。

ナショナル・データベースのデータをもとに、地域における医療提供の質を評価する指標を構築するとともに、医療圏ごとの質的な差異を可視化することで、地域格差の実態を明らかにした。また、地域格差に関するエビデンスをもとに多様なステークホルダーに対する意識調査を実施し、その公開に向けて実践的に合意形成、同意の調達にも取り組んだことは評価される。

他方で、研究開発規模に比べて目標設定がやや過大であったことに加え、エビデンスの公開に対する制度的な制約があったこと、さらに研究開発体制を実働の伴う形で組織化することに課題がみられたことから、結果として医療の地域格差の解明には至ったものの、特別枠として期待された格差の是正に向けた方策の検討と具体的な政策提案には至らなかった。

医療の地域格差の詳細を客観的なデータと手法をもって明らかにしたことそのものは先駆的な業績であり、対象疾病の拡大や指標の妥当性の検証等を通じて、学術的な面においても、また政策実務の観点においても、さらに一層有益な知見を創出することが期待される。積み残された課題となった格差の是正に向けた方策の検討については、本プロジェクトの後継となるプロジェクトにおいて具体的な取り組みが進められることを期待したい。

3. 特記事項

○本プロジェクトの主たる成果となる医療の質の格差に関するエビデンスの公開をめぐることは、導出された成果の政策的な重要性を鑑み、プロジェクト終了後も積極的なフォローアップを期待したい。引き続きステークホルダーからの同意の調達に向けた取り組みを進め

るとともに、政策当局との間においても情報の開示に向けた協議を進めることが望まれる。
○医療格差の是正に向けた方策を具体的に検討するうえでは、特に政策評価や政策立案に
関して多くの知見が蓄積されている社会科学諸分野との積極的な連携を期待したい。

以上